

< 実践事例 昭島市立玉川小学校 >

1. 取組・活動名

「障害者理解教育」

2. 取組・活動のねらい

- 東京 2020 大会後の「共生社会」を実現するため、障害者理解の学習や障害者スポーツの体験、障害者との交流を通じて、心のバリアフリーを子供たちに浸透させる。
- 多様性を尊重し、共生社会の実現や国際社会の平和と発展に貢献できる力の素地を養う。
- 障害のある方への理解を深め、よりよい社会を築く基礎的な考え方を身に付ける。

3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間・5時間」

4. 実施上の工夫

- ・障害者との交流や障害者スポーツの体験を通して、障害についての学習を深めていくが、交流や体験の活動だけで終わらないように、学習のねらいを明確に示す。
- ・障害者スポーツの体験においては、スポーツは障害のあるなしに関わらず、すべての人にとって大切なものであることに気付くことができるようにする。
- ・障害者との交流においては、障害や障害者について事前に学習することにより、質疑応答を通して、障害者への理解を一層深められるようにする。
- ・教室の学習に留まることなく、広く地域や社会に目を向けられるようにする。

5. 本取組・活動の内容



「ゴールボール体験」

- ・ウォーミングアップとボールを転がしたり受けたりする練習、そしてルール確認の後、全員がゲームを楽しんだ。
- ・本来は、耳だけを頼りに、聴覚以外の感覚を研ぎ澄ませて行うスポーツであるが、児童が大きな不安を抱かないように、「ボールをここに置きます」「ボールがラインから出ました」などの声を出し合いながら進めた。



「視覚障害者の講話」

- ・目の不自由な方をお招きして、お話を伺った。
- ・盲導犬と一緒に不自由なく歩いたり、黒板に名前を書いて自己紹介をしたりする姿に、子供たちは驚きを隠せないようで、「どうして」「なぜ」などの質問が続いた。
- ・事前に学習したことを踏まえて、障害や障害者のことを少しでも知ろうと、交流を深めた。



「障害体験」

- ・車椅子体験や高齢者疑似体験セットの着用、アイマスクの着用を行った。
- ・それぞれの体験のねらいや方法が練られており、車椅子に乗ってみたとか、目隠しをして歩いてみたとか、単なる体験活動に留まることなく、体験を通して、障害や障害者について考える時間となった。
- ・いずれも、安全な実施に配慮しながら行った。

6. 成果

- ・障害者スポーツ（ゴールボール体験）では、アイシェード（目隠し）をつけて、最初は不安そうであったが、耳をよく澄ませると鈴の音でボールの位置がわかり、障害のあるなしに関わらず、誰もがスポーツに取り組めるということを知るきっかけになった。
- ・障害者との交流（視覚障害者の講話）では、子供たちは、事前の学習を踏まえ、構えたり躊躇したりすることなく、純粋に素朴な質問を投げかけ、障害者との関わり方などを学ぶことができた。
- ・車椅子体験では、実際に体験することで、日常生活での不自由さなどについて共感しやすくなった。また、バリアフリーやユニバーサルデザインの大切さにも気付き、偏見や差別等の人権尊重の面でも多くのことを感じ取ることができた。
- ・ボランティアマインドの醸成や障害者理解の取組を家庭や地域へ波及させ、子供たちだけでなく、家庭や地域を巻き込んだ取組にすることにより、共生・共助社会の形成につながる雰囲気醸成できた。